

730  
111

岩波文庫

1654

詩集

孔雀船

伊良子清白著

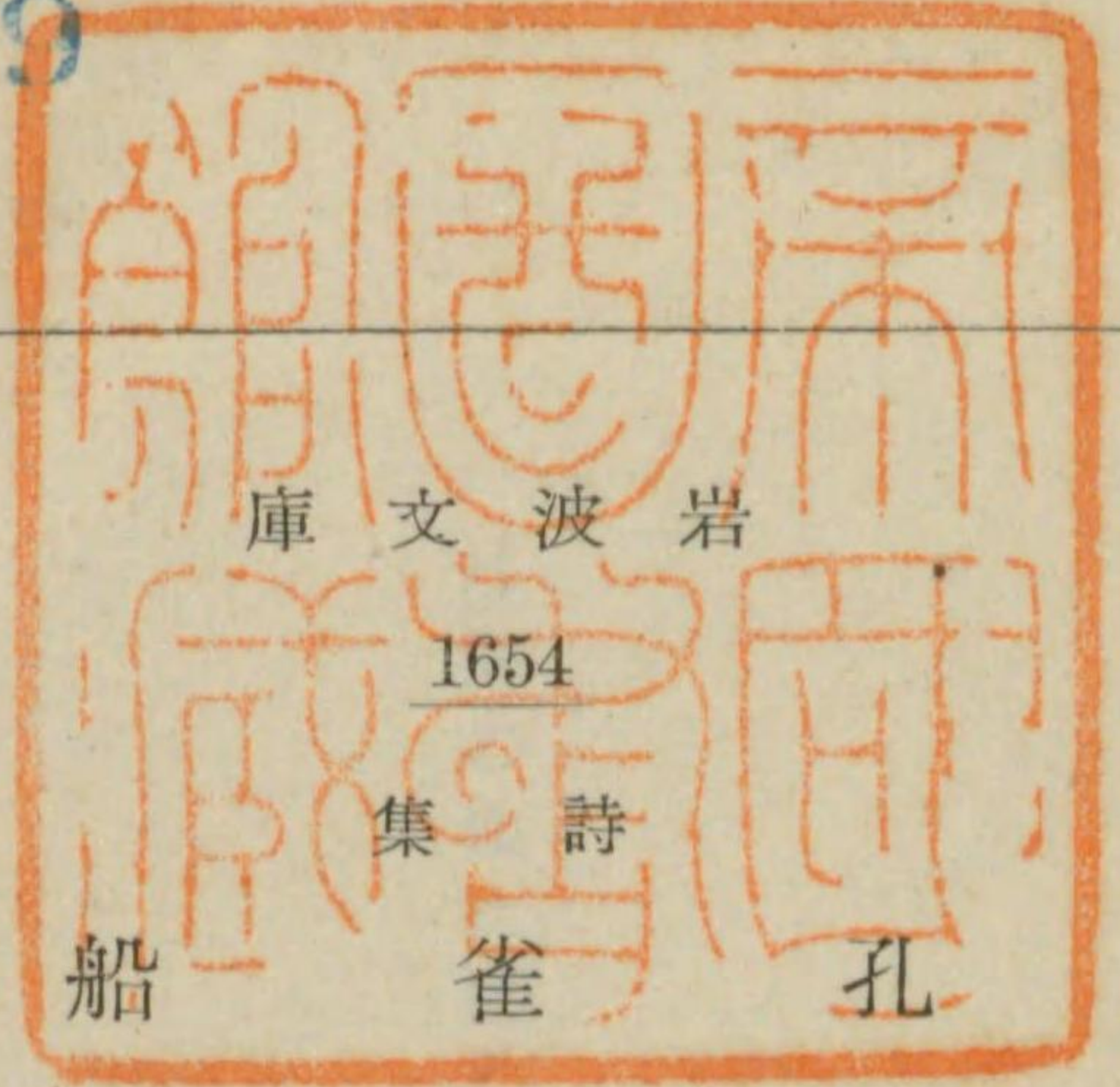
730-111



1200501589165

岩波書店

79



岩波文庫

1654

詩集

孔雀船

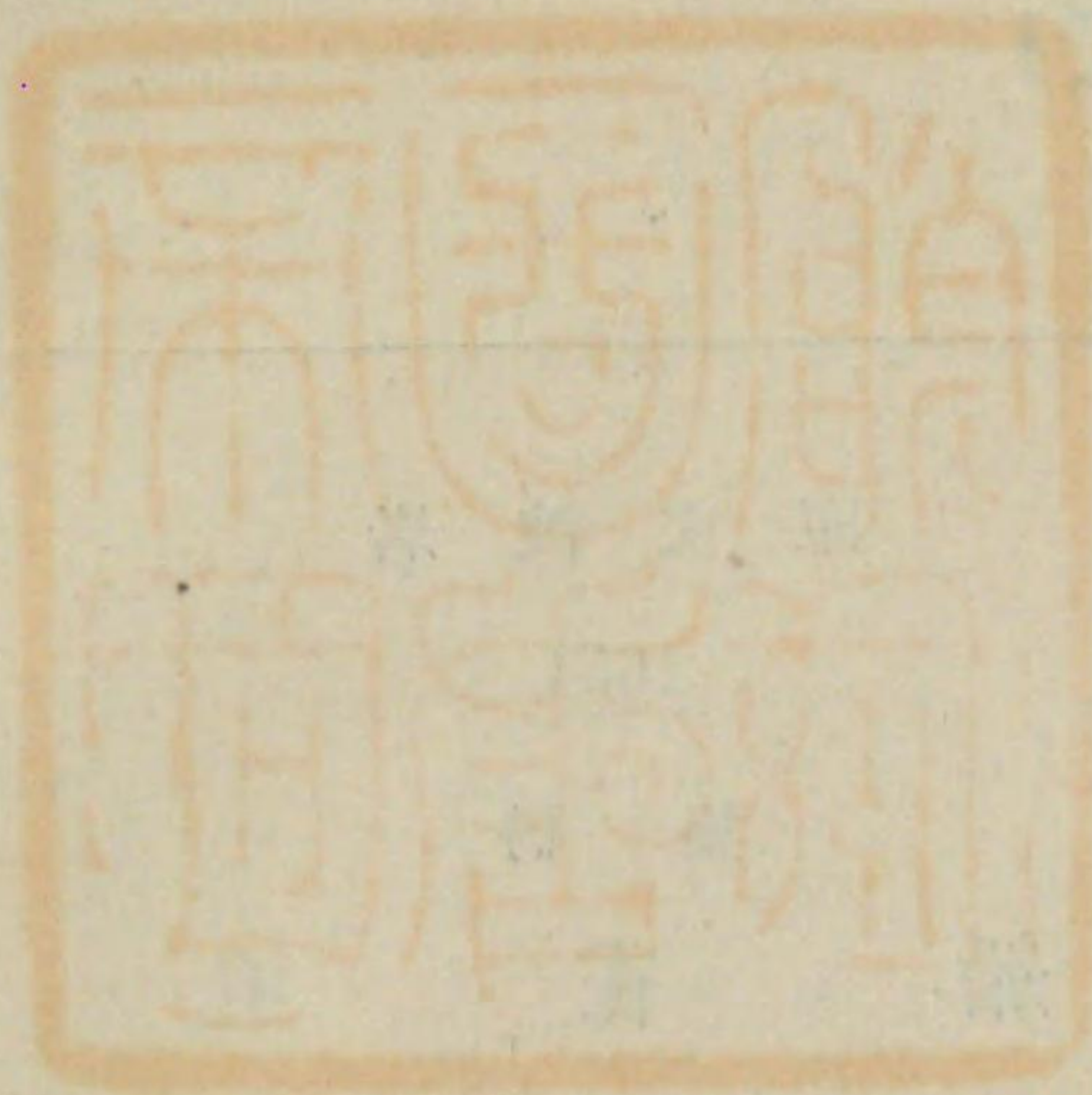
伊良子清白著



岩波書店



故郷の山に眠れる母の靈に



730

111

にしはの木庫文波岩

岩波文庫本のはしに

阿古屋の珠は年古りて其うるみいよいよ深くその色ますます美はしといへり。わがうた詞拙く節おどろおどろしく、十年経て光失せ、二十年すぎて香去り、今はたその姿大方散りぼひたり。昔上田秋成は年頃いたづきける書深き井の底に沈めてかへり見ず、われはそれだに得せず。ことし六十あまり二つの老を重ねて白髪かき垂り齒脱けおち見るかげなし。ただ若き日の思出のみぞ花やげる。あはれ、うつろなる此ふみ、いまの世に見給はん人ありやなしや。

ひるの月み空にかゝり

淡々し白き紙片

うつろなる影のかなしき

おぼつかなわが古きうた

あらた代の光にけたれ

かげろふのうせなんとする

昭和十三年三月

清白しるす

087  
111

岩波文庫の本

小序

小  
この廢墟にはもう祈禱も呪咀もない、感激も怨嗟もない、雰圍氣を失つた死滅世界にどうして生命の草が生え得よう、若し敗壁斷礎の間、奇しくも何等かの發見があるとしたならば、それは固より發見者の創造であつて、廢滅そのものゝ再生ではない。

序

昭和四年三月

志摩にて

清白

目次

目	漂 白	一三
	淡路にて	一六
	秋和の里	一八
	旅行く人に	二〇
	島	二六
	海の聲	二八
次	夏日孔雀賦	三九
	花 賣	五四
	月光日光	五六
	華燭賦	六一
	五月野	七五
	花柑子	八〇

9

孔雀船

次

目

10

不開の間	.....	八二
安乗の稚兒	.....	八七
鬼の語	.....	八九
戯れに	.....	九三
初陣	.....	九五
駿馬問答	.....	一〇〇
解説	.....	一一三

白しろき額がく月つきに現あらはれ  
處ところ女めと成なりて



漂 泊  
 秋風あきかぜ吹ふいて  
 河添かはぞひの旅籠屋はたごやさびし  
 哀あはれなる旅たびの男おとこは  
 夕暮ゆふぐれの空そらを眺ながめて  
 いと低ひくく歌うたひはじめぬ  
 亡母なまはは

漂 泊





亡父は  
童子と成りて  
圓き肩銀河を渡る

柳洩る

夜の河白く

河越えて煙の小野に

かすかなる笛の音ありて

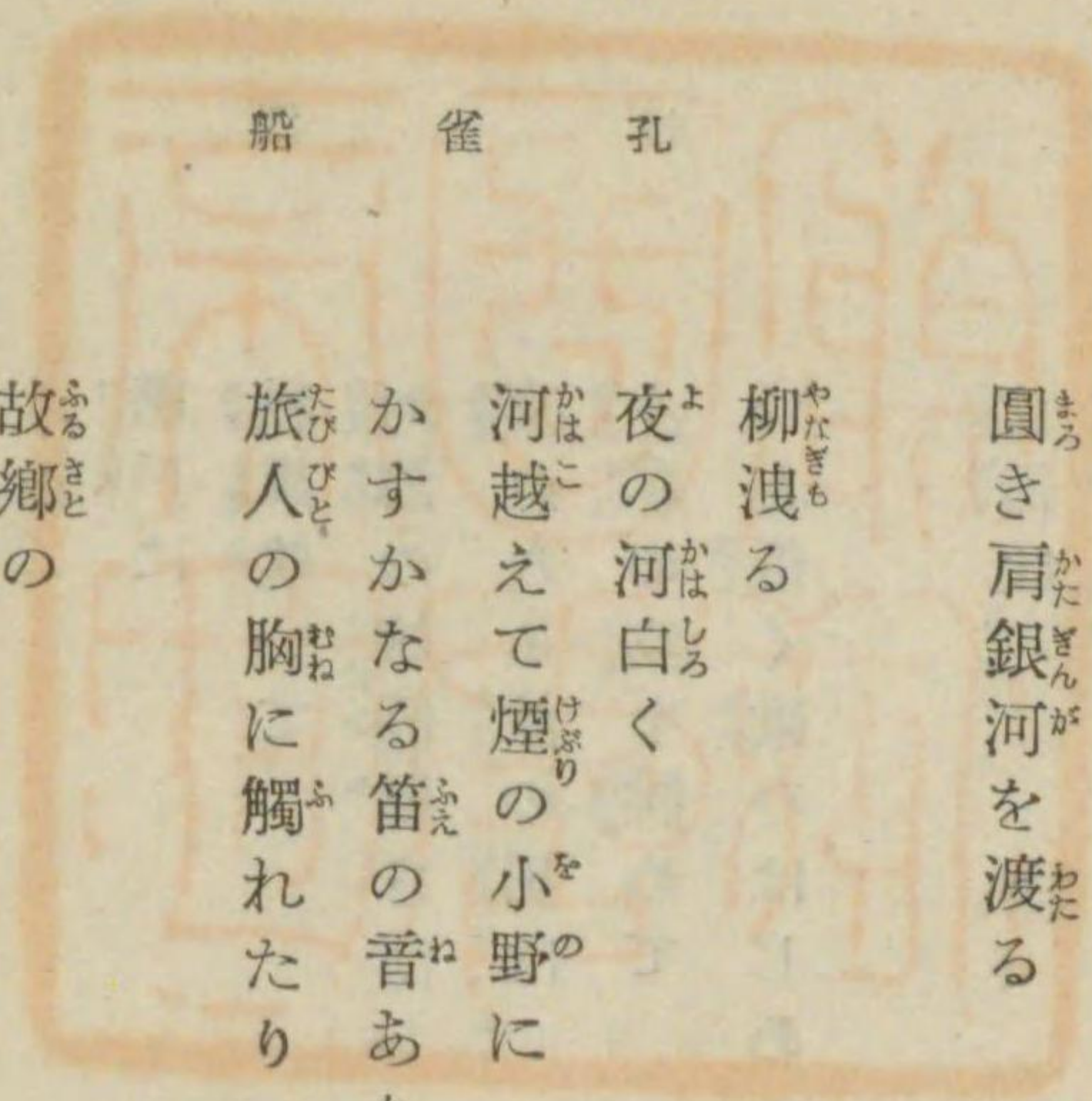
旅人の胸に觸れたり

故郷の

谷間の歌は

續きつゝ断えつゝ哀し

大空の返響の音と



地の底のうめきの聲と  
交りて調は深し

旅人に

母はやどりぬ

若人に

父は降り

小野の笛煙の中に

かすかなる節は残り

旅人は

歌ひ續けぬ

嬰子の昔にかへり

微笑みて歌ひつゝあり

淡路にて

古翁しま國の  
野にまじり覆盆子摘み  
門に来て生鈴の  
百層を驕りよぶ

白晶の皿をうけ  
鮮けき乳を灑ぐ  
六月の飲食に  
けたままし虹走る

清涼の里いでよ  
松に行き松に去る  
大海のすなどりは  
ちぎれたり繪巻物

鳴門の子海の幸  
魚の腹を胸肉に  
おしあてよ見よ十人  
同音にのぼり来る

秋和の里

月に沈める白菊の  
秋冷まじき影を見て  
千曲少女のたましひの  
ぬけかいでたるこゝちせる

佐久の平の片ほとり  
あきわの里に霜やおく  
酒うる家のさゞめきに  
まじる夕の鴈の聲

蓼科山の彼方にぞ  
年経るをろち棲むといへ  
月はろくとうかびいで  
八谷の奥も照らすかな

旅路はるけくさまよへば  
破れし衣の寒けきに  
こよひ朗らのそらにして  
いとゞし心痛むかな

旅行く人に

雨の渡に

順禮の

姿寂しき

夕間暮

霧の山路に

駕昇の

かけ聲高き

朝朝

旅は興ある

頭陀袋

重きを土産に

歸れ君

悪魔木暗に

ひそみつゝ

人の財を

ねらふとも

天女泉に

下り立ちて

小瓶洗ふも

目に入らむ

山蛭膚やまびるはだに

吸すひ入いらば

谷やに藥やく水すい

溢あふるべく

船ふね醉ろひ海うみに

苦くるしむも

龍りゆう神じん臟ぞうを

醫いすべし

鳥とりの戸かほに

火ひは燃もえて

山やまに地ち獄ごくの

吹い嘘ぐ聲こゑ

潮うしほに異い香か

薰くんずれば

海うみに微み妙めうの

蜃かひ氣やぐら樓

暮くれて驛うまやの

町まちに入いり

旅はたご籠ごの門かどを

くゞる時とき

米こめの玄くろきに

驚おどろきて

圓位の笠を  
 ふみしめて  
 頂けば  
 風俗君の  
 鹿島立  
 翁さびたる  
 可笑しさよ

里に都を  
 説く勿れ  
 女房語部  
 背すりて  
 村の歴史を  
 講ずべく  
 主膳夫  
 雉子を獲て  
 旨き羹  
 とよのへむ  
 芭蕉の草鞋

島

黒潮くろしほの流ながれて奔はしる  
沖中おきなに漂たぎふ島しまは

眠ねむりたる巨人きよじんならずや  
頭かしらのみ波なみに出い出して

巖いわ々として岩いわ重かされば  
目めや鼻はなや顔かほ何なにぞ奇きなる

裸はだか々として樹きを被からず

聳そびえたる頂いた高たかし

鳥とり啼なくも魚うを群むれ飛とぶも  
雨あめ降ふるも日ひの出い入でるも

青空あおぞらも大海おほうみ原はらも  
春はると夏なつ秋あきと冬ふゆとも

眠ねむりたる巨人きよじんは知しらず  
幾いく千せん年ねん頑がんたり嶒がくたり

海の聲

いさゝむら竹打戦ぐ  
 丘の徑の果にして  
 くねり可笑しくつらくに  
 しげるいそべの磯馴松  
 花も紅葉もなけれども  
 千鳥あそべるいさごぢの  
 渚に近く下り立てば  
 沈みて青き海の石

貝や拾はん莫告藻や  
 摘まんといひしそのかみの  
 歌をうたひて眞玉なす  
 いさごのうへをあゆみけり  
 波と波とのかさなりて  
 砂と砂とのうちふれて  
 流れさゞらく聲きくに  
 いせをの蟹が耳馴れし  
 音としもこそおぼえざれ  
 社をよぎり寺をすぎ  
 鈴振り鳴らし鐘をつき  
 海の小琴にあはするに



澄みてかなしき簫となる

御座の灣西の方

和具の細門に船泛けて

布施田の里や青波の

潮を渡る蟹の兒等

われその船を泛べばや

われその水を渡らばや

しかず纜解き放ち

今日は和子が伴たらん

見ずやとも邊に越賀の松

見ずやへさきに青の峰

ゆたのたゆたのたゆたひに  
潮の和みぞはかられぬ

和みは潮のそれのみか

日は麗らかに志摩の國

空に黄金や集ふらん

風は長閑に英虞の山

花や縣をよぎるらん

よしそれとても海士の子が

歌うたはずば詮ぞなき

歌ひてすぐる入海の

さし出の岩もほゝゑまん

言葉すくなき入海の  
 波こそ君の友ならめ  
 大海原に男のこらは  
 あまの少女は江の水に

さても縑の衣ならで  
 船路間近き藻の被衣  
 女だてらに水底の  
 黄泉國にも通ふらむ

黄泉の醜女は嫉妬あり  
 阿古屋の貝を敷き列ね  
 顔美き子等を誘ひて  
 岩の櫃もつくるらん

さばれ海なる底ひには  
 父も沈みぬちゝのみの  
 母も伏しぬ柞葉の  
 生れ乍らに水潛る  
 歌のふしもやさとるらん

櫛も捨てたり砂濱に  
 簪も折りぬ岩角に  
 黒く沈める眼のうちに  
 映るは海の泥のみ

若きが膚も潮沫の  
 觸るゝに早く任せけむ

いは間にくつる捨錨  
それだに里の懐しき

哀歌をあげぬ海なれば  
花草船を流れすぎ

をとめの群も船の子が  
袖にかくるゝ秋の夢

夢なればこそ千尋なす

海のそこひも見ゆるなれ

それその石の圓くして

白きは星の果ならん

いまし蟹の子臈拍子の

など亂聲にきこゆるや

われ今海をうかがふに

とくなが顔は蒼みたり

ゆるさせたまへ都人

きみのまなこは朗らかに

いかなる海も射貫くらん

傳へきくらく此海に

男のかげのさすときは

かへらず消えず潛女の

深き業とぞ怖れたる

われ微笑にたへやらず

肩を叩いて童形の



神かみに翼つばさを疑うたがひし  
それもゆめとやいふべけん

島しまこそ浮うかべくろくと

この入海いりうみの島しまなれば

いつ羽衣はごろもの落おち沈しづみ

飛とばず翔かげらず成なりぬらむ

見みれば紫日むらさきひを帯おびて

陽炎かぎりひわたる玉たまのつや

つや／＼われはうけひかず

あまりに軽かるき姿すがたかな

白しろら松原まつはら小貝濱こがひはま

泊はつるや小舟船越こぶねがしの

昔むかしは汐しほも通かまひけん

これや月日つきひの破は壊壊ならじ

潮しほのひきたる煌砂きらすな

うみの子こならで誰たれかまた

かゝる汀みぎはに灰白ほのじろき

鏡かきありとや思おもふべき

大海原おほうなはらと入海いりうみと

こゝに迫せまりて海神わたつみが

こゝろなぐさや手てすさびや

陸くがを細ほそめし鑿のみの業わざ

今細雲の曳き渡し  
 紀路は遙けし三熊野や  
 白木綿咲ける海岸に  
 落つると見ゆる夕日かな

夏日孔雀賦

園の主あるじに導みちびかれ  
 庭にはの置おき石いし燈とう籠ろう  
 物もの古ふるる木こ立たち築つき山やまの  
 景けい有ある所ところうち過すぎて  
 池いけのほとりを來きて見みれば  
 棚たなにつくれる藤ふたばの花はな  
 紫むらさき深こき彩あやぐも雲もの  
 陰かげにかくるゝ鳥屋とやにして  
 番つがひの孔雀くじやくすな砂すなを踏ふみ  
 優いなる姿すがた睦むつるゝよ

地に曳く尾羽の重くして  
 歩はおそき雄の孔雀  
 雌鳥を見れば嬌やかに  
 柔和の性は具ふれど  
 綾に包める毛衣に  
 己れ眩き風情あり

雌鳥雄鳥の立並び  
 砂にいざよふ影と影  
 飾り乏き身を恥ぢて  
 雌鳥は少し退けり  
 落羽は見えず砂の上  
 清く掃きたる園守が

帯の痕も失せやらず  
 一つ落ち散る藤浪の  
 花を啄む雄の孔雀  
 長き花總地に垂れて  
 歩めば遠し砂原  
 見よ君來れ雄の孔雀  
 尾羽擴ぐるよあなや今  
 あな擴げたりことくく  
 こゝろ籠めたる武士の  
 晴の鎧に似たるかな  
 花の宴宮内の  
 櫻襲のごときかな  
 一つの尾羽をながむれば  
 右と左にたち別れ

みだれて靡く細羽の  
 金糸の縫を捌くかな  
 圓く張りたる尾の上に  
 圓くおかるゝ斑を見れば  
 雲の峯湧く夏の日に  
 炎は燃ゆる日輪の  
 半ば蝕する影の如  
 さても面は濃やかに  
 げに天鷲絨の軟かき  
 これや觸れても見まほしの  
 指に空しき心地せむ  
 いとゞ和毛のゆたかにて  
 胸を纏へる光輝と

紫深き羽衣は  
 紺地の紙に金泥の  
 文字を透すが如くなり  
 冠に立てる二本の  
 羽は何物直にして  
 位を示す名鳥の  
 これ頂の飾なり  
 身はいと小さく尾は廣く  
 盛なるかな眞白なる  
 砂の面を歩み行く  
 君それ砂といふ勿れ  
 この鳥影を成す所  
 妙の光を眼にせずや  
 仰げば深し藤の棚

八百重の雲は飛ばずとも  
 響かざらめやその羽がひ  
 獅子よ空しき洞をいで  
 小暗き森の巖角に  
 その鬣をうち振ふ  
 猛き姿もなにかせむ  
 鷺よ御空を高く飛び  
 日の行く道の縦横に  
 貫く羽を搏ち羽ぶく  
 雄々しき影もなにかせむ  
 誰か知るべき花蔭に  
 鳥の姿をながめ見て  
 朽ちず亡びず價ある  
 永久の光に入りぬとは

王者にかざす覆蓋の  
 形に通ふかしこさよ  
 四方に張りたる尾の羽の  
 めぐりはまとふ薄霞  
 もとより鳥屋のものなれど  
 鳥屋より廣く見ゆるかな  
 何事ぞこれ圓らかに  
 張れる尾羽より風出で  
 見よ漣の寄るごとく  
 羽と羽とを疾くぞ過ぐ  
 天つ錦の羽の戦ぎ  
 香りの草はふまずとも  
 香らざらめやその和毛



誰か知るべきこゝろなく  
 庭逍遙の目に觸れて  
 孔雀の鳥屋の人の世に  
 高き示しを與ふとは  
 時は滅びよ日は逝けよ  
 形は消えよ世は失せよ  
 其處に残れるものありて  
 限りも知らず極みなく  
 輝き渡る様を見む  
 今われ假りにそのものを  
 美しとのみ名け得る

振放け見れば大空の  
 日は午に中たり南の

高き雲間に宿りけり  
 織りて隙なき藤浪の  
 影は幾重に匂へども  
 紅燃ゆる天津日の  
 焰はあまり強くして  
 梭と飛び交ひ箭と亂れ  
 銀より白き穂を投げて  
 これや孔雀の尾の上に  
 盤渦巻きかへり送り  
 或は露と溢れ零ち  
 或は霜とおき結び  
 彼處に此處に戯るゝ  
 千々の日影のたゞずまひ  
 深き浅きの差異さへ

煙は深し園の内  
 石も青葉や萌え出でん  
 雫も堅き思あり  
 思へば遠き冬の日  
 かの美しき尾も凍る  
 寒き埒に起臥して  
 北風通ふ鳥屋のひま  
 雙の翼うちふるひ  
 もとよりこれや靈鳥の  
 さすがに羽は亂さねど  
 塵のうき世に捨てられて  
 形は薄く胸は瘦せ  
 命死ぬべく思ひしが

色薄尾羽にあらはれて  
 涌来る彩の幽かにも  
 未は朧に見ゆれども  
 盡きぬ光の泉より  
 ひまなく灌ぐ金の波  
 と見るに近き池の水  
 あたりは常のまゝにして  
 風なき晝の藤の花  
 静かに垂れて咲けるのみ  
 今夏の日の初めとて  
 菖蒲刈り葺く頃なれば  
 力あるかな物の榮  
 若き緑や樹は繁り

かくばかりなるさいなみに  
 鳥はいよく美しく  
 奇しき戦や冬は負け  
 春たちかへり夏來り  
 見よ人にして桂の葉  
 鳥は御空の日に向ひ  
 尾羽を擴げて立てるなり  
 讚に堪へたり光景の  
 庭の面にあらはれて  
 雲を駆け行く天の馬  
 翼の風の疾く強く  
 彼處蹄や觸れけんの  
 雨も溶き得ぬ深緑  
 澱未だ成らぬ新造酒の

流を見れば倒しまに  
 底ことくくあらはれて  
 天といふらし盃の  
 落すは浅黄瑠璃の河  
 地には若葉の神飾り  
 誰行くらしの車路ぞ  
 朝と夕との雙手もて  
 撃ぐる珠は陰光  
 溶けて去なんす春花に  
 くらべば強き夏花や  
 成れるや陣に驕慢の  
 汝孔雀よ華やかに  
 又かすかにも濃やかに  
 千々の千々なる色彩を

間なく時なく眩ゆくも  
 標はし示すたふとさよ  
 草は靡きぬ手を擧げて  
 木々は戦ぎぬ袖振りて  
 即ち物の證明なり  
 かへりて思ふいにしへの  
 人の生命の春の日に  
 三保の松原漁夫の  
 懸る見してふ天の衣  
 それにも似たる奇蹟かな  
 こひねがはくば少くも  
 此處も駿河とよばしめよ  
 斯くて孔雀は尾ををさめ

妻戀ふらしや雌をよびて  
 語らふごとく鳥屋の内  
 花恥かしく藤棚の  
 柱の陰に身をよせて  
 隠るゝ風情哀れなり  
 しばく藤は砂に落ち  
 ふむにわづらふ鳥と鳥  
 あな似つかしき雄の鳥の  
 羽にまつはる雌の孔雀

花賣

花賣娘名はお仙

十七花を賣りそめて

十八戀を知りそめて

顔もほてるや恥かしの

蝮に噛まれて脚切るは

山家の子等に驗あれど

戀の附子矢に傷かば

毒とげぬくも晩からん

村の外れの媼にきく

昔も今も花賣に

戀せぬものはなかりけり

花の壘はす業ならん

市に艶なる花賣が

若き脈搏つ花一枝

彌生小窓にあがなひて

戀の血汐を味はん

月光の

語るらく

わが見しは一の姫

一葉舟湖にうけて

霧の下まよひては

髪かたちなやましく

月光日光

月光の

語るらく

わが見しは一の姫

古あをき笛吹いて

夜も深く塔の

階級に白々と

立ちにけり

日光の

語るらく

わが見しは二の姫

香木の髓香る

槽桁や白乳に

浴みして降りかゝる

花姿天人の

喜悦に地どよみ

虹たちぬ

日光の

わが見しは二の姫

語るらく

城近く草ふみて

妻覓くと來し王子は

太刀取の恥見じと

火を散らす駿足に

かきのせて直走に

わが見しは一の姫

死の島の岩陰に

青白くころび伏し

花もなくむくろのみ

冷えにけり

日光の

亂れけり

わが見しは二の姫

語るらく

顔映る圓柱

驕り鳥尾を觸れて

風起り波怒る

霞立つ空殿を

七尺の裾曳いて

黄金の跡印けぬ

月光の

語るらく

親戚誰彼  
宴をたすけ  
小皿の音

律師は麓の  
寺をいでよ  
駕は山の上  
竹の林の  
夕の家の  
門に入りぬ

華燭賦

國領を去りし時  
春風は微吹きぬ



この夕ゆふべ  
雪ゆきあり

夕ゆふべは  
美うつくしき時とき

夕ゆふべは  
清きよき時とき

夕ゆふべは  
樂たのしき時とき

静しずかに暮くるよ  
山やまの夕ゆふべ  
戸とを壓おさして

燭しよくを呼よぶ聲こゑ  
厨くりやにひゞき  
背せ戸とに起おる

小こ桶づくの水みづに  
浸ひたすは若わか菜な

若わか菜なを切きるに  
俎ま板いた馴なれず

新あたら  
新あたらしき刃はの  
痕あともなければ

菱ひしがた形がたなせる

三じやく尺ちやくの雪ゆき  
窓まどの外そとに

山人やまびと騎奢おごりに

紅くれなるなるを

盃さかづきの色いろ

酌くむに盃さかづきあり

琥珀こほろの酒さけ

長人ちやうじんを煩わづらはすに  
堪たへたり夕ゆふべ

霜毫しやうがう威ゐあり

律師りし席せきに入いつて

名なはいはず  
この夕ゆふべは  
名ななし

この夕ゆふべ 月つきあり  
宴うたげあり

火ひの氣弱けわきを

憂うれひて

竈かまどにのみ

立たつな

室しつに入いりて

花はなの人ひとを見よ

花はなの人ひとと

よびまゐらせて

この夕ゆふべは

長ずと言ふか

紅は紅くれなるの

芙蓉の花の

秋の風あきのかぜに

折れたる其日を

市の小路いちのこうぢの

店に獲たるを

律師詩りししに堪能かんのち

箱の蓋はたかに

紅花盃こうくわはいと

書して去りぬ

紅花盃こうくわはいを

重ねて

雪夜の宴せつやのえん

月出でたり

月出でたるに

島臺しまだいの下暗もとくらき

島臺しまだいの下

暗くらき

蓬萊ほうらいの

松まつの上に

斜なめにおとす

光ひかりなれば

銀ぎんの錫すず懸か

袴はかまのうへに

額ぬか白しろき人ひと 室むろにあり  
陰かげをうけて

燭しよくを剪きる時とき  
眉まゆを見れば

若わかき木き樵こりの

怨えんずる恨うらみ 今いま無なし  
風かぜよく形かたちに 結むすぶ時ときは  
逆さからひ吹ふくと

山やまの竹たけより 用もち意いあらむや

陶す瓶びんの口くちに 笹ささを摘つみて

插させしのみ

王わう者じやの調てう度どに

似にぬは何なに々々

其その子この帶おびは

うす紫むらさきの

友ゆう禪ぜん染そめの

唐とう縮ちぢ緬めんか

艶つやある髪かみを

困こづずる席せきは 手てをうちかさね

花はなのむしろ

筵せじろの色いろを

評ひやうするには

まだ唇くちびるの

紅べにぞ深かき

北きたの家いえより

南なみの家いえに

來くる道みちすがら

得えたる思おもひは

花はなにあらず

蜜みつにあらず

花はなよりも

蜜みつよりも

美うつくしく甘あまき

思おもひは胸むねに溢あふれたり

雷いかづち落ちて

蕪やぶを燒やきし時とき

諸もろ手に腕かひなを

許ゆるせし人ひとは

今いま相あひま對むかひて

月つきを挾はさむ

盃さかづきとるを

天の上

羞る二人は

若き星の

酒の泉の

前に臨みて

香へる浪に

恐づる風情

紅花盃

琥珀の酒

白き手より

荒き手にうけて

百の矢うくるも

去るな二人

御寺の塔の

扉に彫れる

神女の戯れ

笙を吹いて

舞ふにまされる

雪夜のうたげ

律師駕に命じて

北の家に行き

月下の氷人

去りて後

二人いささか

容儀を解きぬ

夜を賞するに

律師の詩あり

詩は月中に

桂樹掛り

千丈枝に

銀を着く

銀光溢れて

家に入らば

卜する所

幸なりと

五月野

五月野の晝しらみ

瑠璃轉の鳥なきて

草長き南國

極熱の日に火ゆる

謎と組む曲路

深沼の岸に盡き

人形の樹立見る

石の間青き水



水を截る圓肩に  
睡蓮花を分け  
のぼりくる美し君  
柔かに眼を開けて

玉藻髮捌け落ち  
眞素膚に翻へる浪  
木々の道木々に倚り  
多の草多にふむ

葉の裏に虹懸り  
姫の路金撲つ  
大地の人離野  
變化居る白日時



垂鈴の百濟物  
熟れ撓む石の上  
みだれ伏す姫の髪  
高圓の日に乾く

手枕の腕つき  
白玉の夢を展べ  
處女子の胸肉は  
力ある足の弓

五月野の濡跡道  
深沼の小黒水  
落星のかくれ所と



目路のはて岸木立  
 晝下ちず日の真洞  
 迷野の道の奥  
 水姫を誰知らむ

足うらふむ水の梯  
 物の音遠ざかる

傳へきく人の子等

空像の數知らず  
 うかびくる岸の隈  
 湧き上ぼる高水に  
 いま起る物の音

めざめたる姫の面  
 丹穂なす火にもえて  
 たわわ髪身を起す  
 光宮玉の人

微笑みて下り行く  
 湖の底姫の國

花 柑 子

島國の花柑子  
 高圓に匂ふ夜や  
 大渦の荒潮も  
 羽をさめほゝゑめり  
 病める子よ和の今  
 窓に倚り常花の  
 星村にぬかあてゝ  
 さめくとなけよかし

生をとめ月姫は  
 新なる丹の皿に  
 開命貴寶を盛り  
 よろこびの子にたびん  
 清らなる身とかはり  
 五月野の遠を行く  
 花環虹めぐり  
 銀の雨そゝぐ

花 柑 子

不 開 の 間

香 の 物

焚 き さ し

採 火 女 め く

影 動 き

き え に け り

夢 の 華

處 女 の

胸 に さ き

き ざ は し を

の ぼ る か

不 開 の 間

花 吹 雪

ま ぎ れ に

さ そ は れ て

い で た ま ふ

館 の 姫

蝕 め る

古 梯

眼 の 前 に

櫓 だ つ

百年を  
 人柱  
 えも朽ちず  
 年若き  
 つはもの  
 戀人を  
 持ち乍ら  
 うめられぬ  
 怪し腫  
 炎に  
 身は燃えて  
 死にながら

諸扉  
 さと開く  
 風のごと  
 くらやみに  
 誰ぞあるや  
 色蒼く  
 まみあけ  
 衣冠して  
 東帯の  
 人立てり  
 思ふ今  
 いけにへ

志摩の果安乗の小村  
 早手風岩をどよもし  
 柳道木々を根こじて  
 虚空飛ぶ断れの細葉  
 水底の泥を逆上げ  
 かきにごす海の病  
 そより立つ波の大鋸  
 過げとこそ船をまつらめ

安乗の稚兒

輝ける  
 何しらん  
 禁制  
 姫の裾  
 なほ見えぬ  
 扉とづ  
 白壁に  
 居る蟲  
 春の日は  
 うつろなす  
 暮れにけり

とある家に飯蒸かへり  
男もあらず女も出で  
稚兒ひとり小籠に坐り  
ほゝゑみて海に對へり

荒壁の小家一村

反響する心と心

稚兒ひとり恐怖をしらず

ほゝゑみて海に對へり

いみじくも貴き景色

今もなほ胸にぞ跳る

少くして人と行きたる

志摩のはて安乗の小村

鬼の語

顔蒼白き若者に

秘める不思議かばやと

村人数多來れども

彼はさびしく笑ふのみ

前の日村を立出で

仙者が嶽に登りしが

恐怖を抱くものゝこと

山の景色を語らはず

傳へ聞くらく此河の  
きはまる所瀧ありて  
其れより奥に入るものは  
必ず山の祟あり

蝦蟆氣を吹いて立曇る  
篠竹原を分け行けば  
冷えし掌あらはれて  
項に顔に觸るゝとぞ

陽炎高さ二萬尺  
黄山赤山黒山の  
劍を植ゑたる頂に  
祕密の主は宿るなり

盆の一日は暮れはてゝ  
淋しき雨と成りにけり  
怪しく光りし若者の  
眼の色は冴え行きぬ

劉邦未だ若うして  
谷路の底に蛇を斬りつ  
而うして彼れ漢王の  
位をつひに羸ち獲たり

この子も非凡山の氣に  
中たりて床に隠れども  
禁を守りて愚鈍者に

わが居る家の大地に  
 黒き帝の住みたまひ  
 地震の踊の優なれば  
 下り来れと勅あれど  
 われは行きえず人なれば  
 わが居る家の大空に  
 白き女王の住みたまひ  
 星の祭の艶なれば  
 上り来れと勅あれど

戯れに

鬼の話を語らばす



われは行きえず人なれば

わが居る家の古厨子に

遠き御祖の住みたまひ

とこ降る花のたへなれば

開けて來れとのたまへど

われは行きえず人なれば

わが居る家の厨内

働く妻をよびとめて

夕の設をたづぬるに

好める魚のありければ

われは行きけり人なれば

初 陣

父よ其手綱を放せ

槍の穂に夕日宿れり

數ふればいま秋九月

赤帝の力衰へ

天高く雲野に似たり

初陣の駒鞭うたば

夢杳か兜の星も

きらめきて東道せむ

父よ其手綱を放せ

狐啼く森の彼方に  
 月細くかゝれる時に  
 一すぢの烽火あがらば  
 勝軍笛ふきならせ  
 軍神わが肩のうへ  
 銀燭の輝く下に  
 盃を洗ひて待ちね  
 父よ其手綱を放せ  
 髪蟠くきみ老いませり  
 花若く我胸踊る  
 橋を断ちて砲おしならべ  
 巖高く剣を植ゑて  
 さか落し千丈の崖

大雷雨奈落の底  
 風寒しあゝ皆血汐

父よ其手綱を放せ  
 君しばしうたゝ寝のまに  
 繪巻物逆に開きて  
 夕べ星波間に沈み  
 霧深く河の瀬なりて  
 野の草に亂るゝ螢  
 石の上悪氣上りて  
 亡跡を君にしらせん  
 父よ其手綱を放せ  
 故郷の寺の御庭に

うるはしく列ぶおくつき  
 栗の木こそよげる夜半に  
 たゞ一人さまよひ入りて  
 母上よ晩くなりぬと  
 わが額をみ胸にあてよ  
 ひたなきになきあかしなば  
 わが望満ち足らひなん  
 神の手に抱かれずとも

父よ其手綱を放せ  
 雲うすく秋風吹きて  
 萩芒高なみ動き  
 軍人小松のかげに  
 遠祖らの功名をゆめむ

今ぞ時貝が音ひゞく  
 初陣の駒むちうちて  
 西の方廣野を驅らん

駿馬問答

使者

月毛なり連錢なり  
 丈三寸年五歳  
 天上二十八宿の連錢  
 須彌三十二相の月毛  
 青龍の前脚  
 白虎の後脚  
 忠を踏むか義を踏むか  
 諸蹄の薄墨色  
 落花の雪か飛雪の花か

駿馬の主

生つきの眞白栲  
 竹を剥ぎて天を指す兩の耳のそよぎ  
 鈴を懸けて地に向ふ雙の目のうるほひ  
 擧げる筋怒れる肉  
 銀河を倒にして膝に及ぶ鬣  
 白雲を束ねて草を曳く尾  
 龍蹄の形驕驕の相  
 神馬か天馬か  
 言語道斷希代なり  
 城主の御親書  
 獻上違背候ふまじ  
 曲事仰せ候  
 城主の執心物に相應はず

夫れ駿馬の來るは  
 聖代第一の嘉瑞なり  
 虞舜の世に鳳凰下り  
 孔子の時に麒麟出づるに同じ  
 理世安民の治略至らず  
 富國殖産の要術なくして  
 名馬の所望及び候はず

使者

御馬の具は何々  
 水干鞍の金覆輪  
 梅と櫻の螺鈿は  
 御庭の春の景色なり  
 鞆の縫物は  
 飛鳥の孔雀七寶の縁飾

雲龍の大履脊  
 紗の鞍褙  
 さて蘇芳染の手綱とは  
 人車記の故實に出で  
 鐵地の鐙は  
 一葉の船を形容たり  
 鞆 鞆 鞆は  
 大總小總掛け交せて  
 五色の絲の縷糸に  
 漣組たる連着懸  
 差繩行繩引繩の  
 絲に映ゆる唐錦  
 菱形轡蹄の鐵  
 馬装束の數々を

盡して召されうづるにても  
御錠違背候ふか

駿馬の主

中々の事に候

駿馬の威徳は金銀を忌み候

使者

さらば駿馬の威徳

御物語候へ

駿馬の主

夫れ駿馬の威徳といつば

世の常の口強足駿

笠懸流鏑馬犬追物

遊戯狂言の凡畜にあらず

天竺震旦古例あり

馬は觀音の部衆

雜阿含經にも四種の馬を説かれ

六波羅密の功徳にて

畜類ながらも菩薩の行

悉陀太子金色の龍蹄に

十丈の鐵門を越え

三界の獨尊と仰がれ給ふ

帝堯の白馬

穆王の八駿

明天子の徳至れり

漢の光武は一日に

千里の馬を得

寧王朝夕馬を畫て

桃花馬を逸せり

異國の譚は多かれども  
 類稀なる我宿の  
 一の駿馬の形相は  
 嘶く聲落日を  
 中天に回らし  
 蹄の音星辰の  
 夜碎くる響あり  
 躍れば長髪風に鳴て  
 萬丈の谷を越え  
 馳すれば鐵脚火を發して  
 千里の道に疲れず  
 千斤の鎧百貫の鞍  
 堅轡強鞭  
 鎧かるく

鞍ゆるく  
 轡は噛み碎かれ  
 鞭はうちをれ  
 飽くまで肉の硬き上に  
 身輕の曲馬品々の藝  
 碁盤立弓杖  
 一文字杭渡り  
 教へずして自ら法を得たり  
 扱又絶險難所渡海登山  
 陸を行けば平地を歩むが如く  
 海に入れば扁舟に棹さすに似たり  
 木曾の御嶽駒ヶ嶽  
 越の白山立山  
 上宮太子天馬に騎して

梵天宮に至り給ひし富士の峯  
 高き峯々嶽々  
 阿波の鳴門穩戸の瀬戸  
 天龍刀根湖水の渡り  
 聞ゆる急流荒波も  
 蹄にかけてかつしく  
 肝臆ず駈早し  
 いつかな馳り越えつべし  
 そのほか戦場の砌は  
 風の音に伏勢を覺り  
 雲を見て雨雪をわきまふ  
 先陣先駈拔駈間牒  
 又は合戦最中の時  
 槍矛箭種ヶ島

面をふり體をかはして  
 主をかばふ忠と勇は  
 家子郎等に異ならず  
 かゝる名馬は奥の牧  
 吾妻の牧大山木曾  
 甲斐の黒駒  
 その外諸國の牧々に  
 萬頭の馬は候ふとも  
 又出づべくも候はず  
 名馬の鑑駿馬の威徳  
 あゝら有難の我身や候

使者

御物語奇特に候  
 とうく城に立歸り



再度の御親書  
申し請はゞやと存じ候

駿馬の主

かしまじき御使者候  
及びもなき御所望候へば  
いか程の手立を盡され  
いくばくの御書を遊ばされ候ふとも  
御料には召されまじ  
法螺鉦陣太鼓  
旗さし物笠符  
軍兵數多催されて  
家のめぐり十重二十重  
関の聲あげてかこみ候ふとも  
召料には出さじ

器量ある大將軍にあひ奉らば  
其時こそ駒も榮あれ駒主も  
道々引くや四季繩の  
春は御空の雲雀毛  
夏は垣ほの卯花鴝毛  
秋は落葉の栗毛  
冬は折れ伏す蘆毛積る雪毛  
數多き御馬のうちにも  
言上いたして召され候はん  
拜謁申して駿馬を奉らん

この篇『飾馬考』『騁全書』『武器考證』『馬術全書』『鞍鏡之辯』『春日神馬繪圖及解』『太平記』及び巢林子の諸作に憑る所多し敢て出所を明にす

## 解 説

先づ最初に、「孔雀船」の詩人伊良子清白氏の自傳を再録して置かうと思ふ。

「名は暉造、明治拾年拾月四日鳥取縣八上郡<sup>ヤカミ</sup>曳田村<sup>ひけた</sup>に生る。幼時父母に伴はれて三重縣に轉住。其の地の小學校を経て津中學校を卒業した。中學在學中同志數名と共に和美會雜誌經文學等發行。詩は十六七歳から習作を試みた。次で京都府立醫學校（今の府立醫科大學）に入學三十二年卒業、後東京に出て傳染病研究所東京外國語學校獨逸語學科に學んだ。醫學校在學中から『文庫』『青年文』に寄稿し、出京後は『明星』初期の編輯に參與、またその頃大阪で發行せし『よしあし草』（後に『關西文學』）にも執筆した。常に『文庫』の同人として河井醉茗、横瀬夜雨、其他の多くの同志と共に詩作に努力した。三十九年五月詩集『孔雀船』を出版、所收詩篇僅かに拾八篇であつた。出版と同時に東京を去り、島根大分を経て臺灣に在ること十年、大正七年京都まで歸住、其の間みな官營病院の醫師として多忙に生活した。十一年現住志摩鳥羽に移り、はじめて開業、漸く時間を恵まれた、かくて前後二十三年全く詩を遠ざかつたが、昭和三年出京と共に舊友との再會を機とし再び詩に復活するに至つた。」

夥しい作品のうちから僅かに十八篇の詩を鈔した詩集「孔雀船」の初版が、長原止水畫伯の装幀によつて、東京銀座三丁目の左久良書房から刊行されたのは、明治三十九年の五月であつた。

「新詩壇、新作家の尤なる清白君の處女作詩集は是なり、句々寶石の如く、節々彩翎の如く、長篇は白玉城廓の如く、短篇は爛星の如し、明治年間の自然詩集を知らむと欲せば、希くは本書に就いて、その清且つ高なる絶調に聽かれんことを（書房主人白）」

程なく、かうした廣告文があらはれたり、  
 「醉茗が詩、疎淡にして新警、夜雨が詩、幽婉にして古怪、多少の膏味と、一たびこれを試むるや、快感忘じ難きものありと雖も、其の色澤に於て、其の香氣に於て、一杯食指の動くを禁ずる能はざるの媚態を云ふに當つては、此の稱これを伊良子氏に譲らざる可からず（瀧澤秋曉）」  
 かやうな批評があらはれたりして、詩集「孔雀船」は初めて世に示されたのであつたが、事實は、嘗て日夏耿之介氏が指摘せられたやうに「たゞ文庫といふ小天地にあつては『白眉』であり、『錚々たるもの』である事は『帝國文學』も『早稲田文學』もともに認めてはゐるが、全詩壇に於て如何の詩價があるかといふ事を考へたものは多くはなかつたのである。」

時代は三十年代のロマンティシズムが凋落の過程を辿つて、それに代る自然主義の波が滔々と押しよせて來、或ひは來らんとしてゐる時であつた。

「定型詩や象徴詩を破壊する聲のはげしい時代でした。口語詩も起りかけてゐました。四十年五月、醉茗君が『文庫』の記者を辭し、獨立して起こした詩草社に對立して早稲田詩社が起りました。この一派は詩草社との感情衝突から、『孔雀船』に對して随分ひどい悪聲悪罵を浴びせました。當時の萬朝報で、私を中心にして數日間、匿名の論戦が交はされ、つひに萬朝の記者から、打切りの宣言が出て事ずみとなつたこともあります。しかし、私は前の年、『孔雀船』の出る直前に東京を去つて、島根縣濱田町の病院に赴任し、當時はすでに純然たる醫者になつてゐました。」（昭和四年三月、筆者への書翰の一節）

かくのごとく正當な評價を與へられなかつた詩集「孔雀船」が、ほんの一部の具眼者にはあつたが、日と共にその價值を認められるやうになつたのは、十年二十年の月日を経て、稀觀本中の稀觀本となつた頃からである。

「孔雀船」の聲價は高まり、つひに昭和四年四月、梓書房によつてその再版が刊行された。こ

これは日夏耿之介氏の解説に、中山省三郎の文獻誌的覺書を添へ、外装を凝らしたただけであつて、本文は原書のまま殆んど改訂を加へられなかつた(この文庫本に於ても、同様の方針に據つて、嚴密なる校訂を経る譯である)。

再版の解説の中で、日夏耿之介氏は「詩史は次第に移り、詩家は時とともに變つたが、『孔雀船』に盛られた詩情の正しき後繼者はつひに出なかつた。この詩風たるや、人間すべての想像生活の展開に於て見られる普遍性ある必至のもので、この詩情に對する憧憬と要求とは、如何に世界と時代とが變化しても永代不易である」と、周到な評價を與へられた。

まことに、かやうなリリズムの美と純粹と、たぐひ稀れなるフォルムの美と力とが、初版以來三十有二年の月日を経て、いよいよ深く、いよいよ新鮮な魅力を感じしむるのである。

解 說

昭和十三年早春

中山省三郎

(永井製本)

昭和十三年四月一日印刷  
昭和十三年四月五日發行

孔雀船 \*  
定價二十錢

著者 伊良子清白

發行者 岩波茂雄  
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者 白井赫太郎  
東京市神田區錦町三丁目十一番地

精興社印刷

岩波文庫 1654

發行所

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話一〇一八七・〇一八八番  
九段一〇二二番(小賣部専用)  
振替口座東京二六二四〇番

讀書子に寄す

岩波茂雄

岩波文庫發刊に際して

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。當ては民を愚味ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀のみざるも内容に至つては嚴選最良力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學
古事記 幸田成友校訂
日本書紀 上卷 黒板勝美編
日本書紀 中卷 黒板勝美編
日本書紀 下卷 黒板勝美編
記紀歌謠集 武田祐吉校註
土記 武田祐吉編
祝詞・壽詞 千田 豊編
續日本紀宣命 倉野靈司編
新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
文萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
古語拾遺 加藤玄智校訂
神樂歌・催馬樂 武田祐吉編

古今和歌集 尾上八郎校訂
竹取物語並附録 鳥津久基校訂
伊勢物語 屋代弘賢校訂
土佐日記 池田龜鑑校訂
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂
枕草子(春曙抄) 上 池田龜鑑校訂
枕草子(春曙抄) 中 池田龜鑑校訂
枕草子(春曙抄) 下 池田龜鑑校訂
枕草子(春曙抄) 卷下 池田龜鑑校訂
源氏物語(一) 鳥津久基校訂
源氏物語(二) 鳥津久基校訂
源氏物語(三) 鳥津久基校訂
源氏物語(四) 鳥津久基校訂
源氏物語(五) 鳥津久基校訂
紫式部日記 池田龜鑑校訂
更級日記 西下經一校訂
三條西本 榮花物語 卷上 三條西公正校訂
三條西本 榮花物語 卷中 三條西公正校訂

三條西本 榮花物語 卷下 三條西公正校訂
大鏡 和田英松校訂
梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂
新山家集 佐佐木信綱校訂
水鏡 和田英松校訂
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
藤原定家集(附定家集年譜) 佐佐木信綱校訂
新金槐和歌集 増補 齋藤茂吉校訂
中世歌論集 久松潜一編
六百番歌合 齋藤秋校訂
六百番歌合 齋藤秋校訂
方丈記 山田孝雄校訂
松浦宮物語 齋藤須賀子校訂
保元物語 岸谷誠一校訂
平治物語 岸谷誠一校訂
平家物語 上卷 山田孝雄校訂
平家物語 下卷 山田孝雄校訂
東關紀行・海道記 玉井幸助校訂

十六夜日記 玉井幸助校訂 ★★  
 增鏡 和田英松校訂 ★★  
 神皇正統記 山田孝雄校訂 ★★  
 徒然草 西尾實校訂 ★★  
 兼好法師家集 西尾實校訂 ★★  
 改訂版 花傳書 野上盟一郎校訂 ★★  
 申樂談 義野上盟一郎校訂 ★★  
 龍作書・覺習條條 野上盟一郎校訂 ★★  
 至花道 野上盟一郎校訂 ★★  
 謠曲選集 野上盟一郎校訂 ★★  
 お伽草子 津久基編校 ★★  
 閑吟集 附室町小歌拾遺集 藤田徳太郎校註 ★★  
 好色一代男 西田萬吉校訂 ★★  
 好色一代女 西田萬吉校訂 ★★  
 好色五人女 西田萬吉校訂 ★★  
 西鶴置土産 西田萬吉校訂 ★★  
 本朝標陰比事 和田萬吉校訂 ★★  
 武道傳來記 和田萬吉校訂 ★★  
 武家義理物語 和田萬吉校訂 ★★

日本永代藏 西田萬吉校訂 ★★  
 世間胸算用 和田萬吉校訂 ★★  
 西鶴織留 和田萬吉校訂 ★★  
 西鶴置土産 西田萬吉校訂 ★★  
 奥の細道その他 伊藤松字校訂 ★★  
 芭蕉七部集 伊藤松字校訂 ★★  
 評釋猿蓑 幸田露伴著 ★★  
 芭蕉俳句集 類原退蔵校註 ★★  
 芭蕉連句集 小宮豊隆編 ★★  
 芭蕉書翰集 勝峯晋風編 ★★  
 芭蕉花屋日記 小宮豊隆校訂 ★★  
 風俗文選 伊藤松字校訂 ★★  
 燕村七部集 伊藤松字校訂 ★★  
 燕村俳句集 類原退蔵編註 ★★  
 松の落葉 藤田徳太郎校註 ★★  
 松の性 籾合 近松門左衛門作 籾の性 籾三重 和田萬吉校訂 ★★

曾我會稽 山近松門左衛門作 ★★  
 心中天の綱 和田萬吉校訂 ★★  
 會根崎心 近松門左衛門作 ★★  
 用明天皇職人 近松門左衛門作 ★★  
 駿臺雜話 室鳩巢著 ★★  
 鶉 衣石田元季校訂 ★★  
 雲萍雜志 柳深洪編校 ★★  
 酒落本集 高木好次校訂 ★★  
 雨月物語 上田秋成校訂 ★★  
 玉勝間(上) 本居宣長著 ★★  
 玉勝間(下) 本居宣長著 ★★  
 玉勝間(下) 本居宣長著 ★★  
 玉屋山問 村岡與義校訂 ★★  
 玉屋山問 村岡與義校訂 ★★  
 秘木玉くし 村岡與義校訂 ★★  
 直毘靈・玉銚百首 本居宣長著 ★★  
 良寛詩集 原田勘平譯註 ★★  
 新一茶俳句集 萩原井泉水編 ★★  
 おらが春・我春集 萩原井泉水校訂 ★★  
 一茶父の終焉日記 萩原井泉水校訂 ★★  
 棒說弓張月上卷 和田萬吉校訂 ★★

棒說弓張月中卷 和田萬吉校訂 ★★  
 棒說弓張月下卷 和田萬吉校訂 ★★  
 胡蝶物語 和田萬吉校訂 ★★  
 南總里見八犬傳(一) 小池藤五郎校訂 ★★  
 南總里見八犬傳(二) 小池藤五郎校訂 ★★  
 南總里見八犬傳(三) 小池藤五郎校訂 ★★  
 鈴木北越雪譜 岡田武松校訂 ★★  
 假名手本忠臣藏 竹田出雲校訂 ★★  
 東海道膝栗毛 十返舎一九校訂 ★★  
 柳多留上卷 西原柳兩校訂 ★★  
 柳多留中卷 西原柳兩校訂 ★★  
 柳多留下卷 西原柳兩校訂 ★★  
 浮世風呂 和田萬吉校訂 ★★  
 浮世床 和田萬吉校訂 ★★  
 萬載狂歌集 野崎左文校訂 ★★  
 德和歌後萬載集 野崎左文校訂 ★★  
 大隈言道草徑集 正宗教夫校訂 ★★

平賀元義歌集 齋藤茂吉編註 ★★  
 忍ぶの戀 太田阿彌校訂 ★★  
 縮屋新助 河竹繁俊校訂 ★★  
 鼠小僧 河竹繁俊校訂 ★★  
 赤垣源藏・仲光 河竹繁俊校訂 ★★  
 辨天小衛門 河竹繁俊校訂 ★★  
 實錄先代萩 河竹繁俊校訂 ★★  
 孝子善吉 河竹繁俊校訂 ★★  
 加賀 河竹繁俊校訂 ★★

日本思潮

松翁道話 石川謙校訂 ★★  
 訂校道二翁道話 石川謙校訂 ★★  
 鳩翁道話 石川謙校訂 ★★  
 蘭學事始 杉田玄白著 ★★  
 經濟要錄 佐藤信淵著 ★★  
 一語言志四錄 山田三郎譯註 ★★  
 古史徵開題記 山田三郎校訂 ★★  
 報德記 富田高慶述 ★★  
 二宮翁夜話 福住正兄記 ★★  
 海舟座談 巖本善治編 ★★  
 日本道德論 吉田龍次校訂 ★★  
 講孟餘話 吉田龍次校訂 ★★  
 吉田松陰書簡集 廣瀬豐編 ★★  
 福澤撰集 福澤諭吉著 ★★  
 文明論之概略 福澤諭吉著 ★★  
 福翁自傳 福澤諭吉著 ★★  
 蹇蹇錄 陸奥宗光著 ★★

兆民選集	中江篤介著	嘉治隆一編輯	一年有半・續一年有半	嘉治隆一編輯
日本開化小史	田口卯吉著	嘉治隆一校註		
内村鑑三隨筆集	内村鑑三著			
後世への最大遺物	内村鑑三著			
清澤文集	清澤滿之著			
網島梁川集	安倍能成編			
入木道三部集	麗校訂			
歌舞音樂略史	小中村清矩述			
俗樂旋律考	上原六四郎著			
論畫四種	坂崎坦編			
茶の本	岡倉覺三著	村岡博譯		
<b>現代文學</b>				
小説神髓	坪内逍遙著			
當世書生氣質	坪内逍遙著			
新曲	浦島坪内逍遙著			
赫映	島坪内逍遙著			
ちかたの記	他三篇 森	鴨外著		
キタ・セクスアリス	森	鴨外著		
雁	護持院ケ原の敵討	鴨外作		
左千夫歌集	土屋文明編			
左千夫歌論抄	土屋文明編			
吾輩は猫である	上夏目漱石著			
吾輩は猫である	下夏目漱石著			
坊つちやん	夏目漱石著			
漱虚集	夏目漱石著			
草枕	夏目漱石著			
行人	夏目漱石著			
こゝろ	夏目漱石著			
硝子戸の中	夏目漱石著			
道草	夏目漱石著			
明暗	上卷 夏目漱石著			
明暗	下卷 夏目漱石著			
風流佛・一口劍	幸田露伴著			
五重塔	幸田露伴著			
太郎坊	他三篇 幸田露伴著			
子規歌集	正岡子規著			
墨汁一滴	正岡子規著			
病牀六尺	正岡子規著			
仰臥漫錄	正岡子規著			
二人女房	尾崎紅葉著			
逍遙遺稿	笹川臨風編			
自然と人生	徳富蘆花著			
北村透谷集	島崎藤村編			
觀音岩	前篇 川上眉山著			
觀音岩	後篇 川上眉山著			
源をぢ	他二篇 國木田獨步著			
運命論者	他二篇 國木田獨步著			
號	外他六篇 國木田獨步著			
晚翠詩抄	土井晩翠著			

蒲團・一兵卒	田山花袋著			
生	田山花袋著			
田舎教師	田山花袋著			
あらく	れ徳田秋聲作			
藤村詩抄	島崎藤村自選			
千曲川のスケッチ	島崎藤村著			
生ひ立ちの記	島崎藤村著			
櫻の實の熟する時	島崎藤村著			
飯倉だより	島崎藤村著			
春を待ちつつ	島崎藤村著			
に	え樋口一葉著			
たけくら	え樋口一葉著			
高野聖泉	額花作			
肩かくしの	額花作			
註文帳・白鷺泉	額花作			
歌行	燈泉 額花作			
風流儀法	他三篇 高濱虚子著			
上田敏詩抄	茅野盾々編			
有明詩抄	蒲原有明著			
赤彦歌集	久保田不二子選			
泣菫詩抄	薄田位菫著			
詩集孔雀	船伊良子清白著			
宣	言有鳥武郎著			
入江のほとり	正宗白鳥著			
生まざりしならば	正宗白鳥著			
長塚節歌集	賢藤茂吉選			
腕くらべ	永井荷風作			
おかめ	永井荷風作			
煤	森田草平作			
千鳥	他四篇 鈴木三重吉作			
桑の	實録木三重吉作			
和解・或る	男志賀直哉著			
其姉の	死 男志賀直哉著			
小僧の神様	他十篇 志賀直哉著			
暗夜行路	前篇 志賀直哉著			
白秋詩抄	北原白秋著			
白秋抒情詩抄	北原白秋著			
海神	丸野上彌生子著			
大石良雄	野上彌生子著			
そ	妹 武者小路實篤著			
幸福	武者小路實篤著			
人間萬	歳 武者小路實篤著			
友	情 武者小路實篤著			
銀の匙	勸助作			
若山牧水歌集	若山喜志子選			
波	山本有三著			
青銅の基督	長與善郎著			
陸奥直次郎	長與善郎著			
出家とその弟子	倉田百三著			
布施太子の入山	倉田百三著			
偷	盜 芥川龍之介著			
河	童 芥川龍之介著			
侏儒の言葉	芥川龍之介著			
西方の人	他二篇 芥川龍之介著			

春夫詩鈔 佐藤春夫著  
厭世家の誕生日 佐藤春夫著  
英・米文學

ニートピア (理想郷) トマス・モア著  
ベーコン隨筆集 神吉三郎譯  
フォースタス博士 松尾相譯  
闘技者サムソン 中村爲治譯  
ウエークファイ 神吉三郎譯  
ブレイク抒情詩抄 藤岳文章譯  
バーンズ詩集 中村爲治譯  
湖の麗人 スコット作  
ラム沙翁物語 野上彌生子譯  
阿片常用者の告白 田部重治譯  
イン・メモリアム テニス直訳  
イノック・アーデン 入江直訳  
クリスマス・カロール 森田草平譯

爐邊のこぼろぎ 本多顯彰譯  
二都物語 上巻 佐々木直次郎譯  
二都物語 中巻 佐々木直次郎譯  
二都物語 下巻 佐々木直次郎譯  
ブラウサウル 齋藤勇譯  
喜劇 論 相良徳三譯  
エレホ 山本政喜譯  
ペーター文藝復興 田部重治譯  
緑の木 阿部知二譯  
緑の館 森村豊譯  
月の下の戀劇 (他五篇) 森村豊譯  
ラブラ博物學者 岩田良吉譯  
はるかな國とはい昔 藤岳三郎譯  
ラフカティ東西文學評論 三宅幾三郎譯  
新アラビヤ夜話 佐藤綴葉譯

ワング・ブック ホーソン作  
エヴァンジェリン ロングフェロー作  
ボウ黒猫 (他六篇) 森村豊譯  
ホキツト草の葉 有馬武郎選譯  
王子と乞食 村岡花子譯  
ねぢの廻轉 富田彬譯  
小公子 若松睦子譯  
あしなが 若松睦子譯  
おぢさん 遠藤隆子譯  
荒野に生れて 本多顯彰譯  
地平の彼方 清野暢一郎譯  
限りなきいのち 井上石田譯

寶島 佐々木直次郎譯  
ジーキル博士とハイド氏 岩田良吉譯  
若い人々のために (其他) 岩田良吉譯  
スピアの悲劇 上巻 中西信太郎譯  
ドリアン・グレイ 西村孝次譯  
サロメ 佐々木直次郎譯  
獄中 阿部知二譯  
鯨夫の家 市川又彦譯  
人と超人 市川又彦譯  
思想の達し得る限り (其他) 市川又彦譯  
聖女 (チヤンス・ダルク) 野上彌一譯  
颯風 (タイフーン) 三宅幾三郎譯  
シャイロック 菊池武一譯  
シャイロック 菊池武一譯  
シャイロック 菊池武一譯  
ホームズの帰還 菊池武一譯  
ピーター・パン 本多顯彰譯  
アイランド童話集 山宮允譯

若いゼルテルの悩み 茅野馨作  
ギルヘルム 上巻 林久男譯  
ギルヘルム 下巻 林久男譯  
たぐみと戀 實吉持郎譯  
ヴレンシニタイン 鼓常良譯  
ヴァイルヘルム・テル 櫻井政隆譯  
ヒュペーリオン ヘルゼリオン譯  
黄金寶壺 石川道雄譯  
牡猫の人生 上巻 秋山六郎兵衛譯  
牡猫の人生 下巻 秋山六郎兵衛譯  
ハイルロンケートヒエン 手塚富雄譯  
影を失くした男 井汲越次譯  
全グリム童話集 第一 金田鬼一譯  
全グリム童話集 第二 金田鬼一譯  
全グリム童話集 第三 金田鬼一譯  
全グリム童話集 第四 金田鬼一譯  
全グリム童話集 第五 金田鬼一譯

キツプリング詩集 中村爲治選譯  
ジャンゲルブック 中村爲治譯  
争闘 石田幸太郎譯  
静寂の宿 本多顯彰譯  
若き日の島 姉崎正見譯  
ユリシイズ (一) 森田名原他四名譯  
ユリシイズ (二) 森田名原他四名譯  
ユリシイズ (三) 森田名原他四名譯  
ユリシイズ (四) 森田名原他四名譯  
ユリシイズ (五) 森田名原他四名譯  
マンスフィールド 崎山正毅譯  
スケッチ・ブック アーゲイン作  
自然論 片上伸譯  
短篇集 佐藤清譯  
緋文字 佐藤清譯

賢者ナータン 大庭米治郎譯  
ファウスト第一部 森田名原他四名譯  
ファウスト第二部 森田名原他四名譯  
ヘルマンとドロテア 佐藤通次譯

獨・塊文學









哲學・教育

フランク ラテスの辯明久保 勉 譯
トシク リ ト 阿部次郎 譯
ブラブ ロタゴラス 菊池憲一郎 譯
...

キリスト教の本質 下巻 フォイエルバッハ 著
唯一者とその所有 上巻 スチルネル 著
...

人間的、餘りに人間的 上巻 戸田三郎 著
この人を見よ 安倍能成 著
...

宗教

斷 想―日記抄― ジンメル 著
物質と記憶 ベルグソン 著
時間と自由 ベルグソン 著
...

アウグスの懺悔録 フォン・ハルトナック 著
省察と箴言 ハルナック 著
...

親鸞聖人と讚集 名畑順校注
正法眼蔵隨聞記 和辻哲郎校注
...

天才と遺傳 上巻 ゴールトン著 ★★  
 天才と遺傳 下巻 ゴールトン著 ★★  
 雜種植物の研究 小泉丹著 ★★  
 フアール 昆蟲記 山田吉彦著 ★★  
 第二分冊・第五分冊・第九分冊  
 第十分冊・第十二分冊・第十三分冊  
 第十四分冊・第十七分冊・第十八分冊  
 第二十分冊 既刊 定價各々★

生命の不思議 上巻 後藤格次著 ★★  
 生命の不思議 下巻 後藤格次著 ★★  
 テヤールズ F.ダウキン著 ★★  
 家畜系統史 ケレル著 ★★  
 エネルギイ オストリルト著 ★★  
 科學と假説 山縣春次著 ★★  
 科學の價值 河野伊三郎著 ★★  
 科學と方法 田邊元著 ★★  
 科學者と詩人 吉田洋一著 ★★  
 科學的に見たる 平林初之輔著 ★★  
 科學的宇宙觀の變遷 アーレンウス著 ★★  
 寺田實彦著 ★★

法律・政治

アリストアテナイ(改訂) 原 隨 國譯 ★★  
 テレス人の國家(版) 原 隨 國譯 ★★  
 君 主 論 マキアヴェルリ著 ★★  
 法の精神 上巻 モンテスキュー著 ★★  
 法の精神 下巻 モンテスキュー著 ★★  
 人間不平等起原論 ルソフ著 ★★  
 民 約 論 本林初之輔著 ★★  
 權利のための闘争 イーリントン著 ★★  
 近代民主政治 一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 二十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 三十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 四十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 五十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 六十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 七十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 八十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十一 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十二 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十三 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十四 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十五 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十六 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十七 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十八 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 九十九 松山武義著 ★★  
 近代民主政治 一百 松山武義著 ★★

經濟・社會

ケネー 經濟 表 増井幸雄著 ★★  
 スミ 國富論 上巻 氣賀勘重著 ★★  
 スミ 國富論 下巻 氣賀勘重著 ★★  
 チュル 富に關する省察 永田 清露註 ★★  
 マルサス 經濟學原理 高野岩三郎著 ★★  
 マルサス 經濟學原理 大内兵衛著 ★★  
 マルサス 經濟學原理 吉田秀夫著 ★★  
 マルサス 經濟學原理 吉田秀夫著 ★★  
 經濟學及課税之原理 リカドオ著 ★★  
 クール 富の理論の數學的 小泉信三著 ★★  
 ノー 原理に關する研究 中山伊知郎著 ★★  
 地 代 論 山口正吾著 ★★  
 經濟學試論集 末永茂喜著 ★★  
 ミル 自 傳 西本正美著 ★★  
 社會再組織の 科學的基礎 飛澤謙一著 ★★  
 資本論初版鈔 マルクス著 ★★  
 賃労働と資本 マルクス著 ★★  
 賃銀・價格および利潤 マルクス著 ★★  
 長谷部文雄譯 ★★

フランスに 於ける内亂 マルクス著 ★★  
 フランスに 於ける内亂 久留間敏造譯 ★★  
 改訂 國家、私有財産及 エンゲルス著 ★★  
 國家の起源 西 雅 雄譯 ★★  
 住宅問題 加田哲二著 ★★  
 エンゲル 空想より科學へ 淺野 晃譯 ★★  
 道徳の經濟的基礎 シュタウデンガー著 ★★  
 經濟的財價值 ポーエー・パウエル著 ★★  
 の基礎理論 長 守 憲譯 ★★  
 資本論解説 カウツキー著 ★★  
 カントとマルクス 大里傳平譯 ★★  
 カントとマルクス 卷上 フォアレンダー著 ★★  
 カントとマルクス 卷下 フォアレンダー著 ★★  
 マルクス・社會科學方法論 富永祐治譯 ★★  
 ウエーバー 職業としての學問 尾高邦雄譯 ★★  
 經濟學入門 ローゼンブルグ著 ★★  
 佐野文夫譯 ★★  
 資本論精論 上巻 ローゼンブルグ著 ★★  
 長谷部文雄譯 ★★  
 資本論精論 中巻 ローゼンブルグ著 ★★  
 長谷部文雄譯 ★★  
 資本論精論 下巻 ローゼンブルグ著 ★★  
 長谷部文雄譯 ★★  
 資本論精論 再論 ローゼンブルグ著 ★★  
 長谷部文雄譯 ★★

ローゼンブルグの 手紙 松井圭子編 ★★  
 戰爭 論 上巻 クラウゼヴィッツ著 ★★  
 戰爭 論 下巻 馬込健之助譯 ★★  
 戰爭 論 下巻 馬込健之助譯 ★★  
 勞働者綱領 小泉信三譯註 ★★  
 暴力 論 上巻 木下半治譯 ★★  
 暴力 論 下巻 木下半治譯 ★★  
 暴力 論 下巻 木下半治譯 ★★  
 ベーブル 人論 上巻 草間平作譯 ★★  
 ベーブル 人論 下巻 草間平作譯 ★★  
 婚姻の諸形式 エンゲルス著 ★★  
 木下史郎譯 ★★  
 戀愛と結婚 上巻 エレン・ケイ著 ★★  
 原田 實譯 ★★  
 戀愛と結婚 下巻 エレン・ケイ著 ★★  
 原田 實譯 ★★  
 マルクス・エンゲルス傳 リアザノフ著 ★★  
 長谷部文雄譯 ★★  
 レーニン 社會主義の發展 上 大山岩雄譯 ★★  
 レーニン 社會主義の發展 中 大山岩雄譯 ★★  
 レーニン 社會主義の發展 下 大山岩雄譯 ★★  
 ニシ 資本主義の發展 卷上 西 雅 雄譯 ★★  
 ニシ 何を爲すべきか 平田良備譯 ★★  
 カール・マルクス (他五篇) 伊藤 弘譯 ★★

レーニンの 手紙 中野重治譯 ★★  
 ゴオリキーへの手紙 中野重治譯 ★★  
 シ 帝國主義 長谷部文雄譯 ★★

岩波文庫に就て

□岩波文庫は普及を第一義として刊行する廉價版であります。  
 □内容の厳選 東西古今の古典並に價値高い良書を續々刊行、網羅せしめ、校訂、翻譯に於て、また校正、印刷、製本等に於ても最善の注意を拂つてゐます。  
 □最低の廉價 定價は専ら低廉を旨とし、豐富な内容を小さい形の中に収める形式を採つてゐます。  
 □購求の自由 豫約出版ではありませんので、讀者は何時でも自由に欲しいものを選択購求することが出来ます。全國の書店に取揃へてあります。  
 □携帶の至便 平福百穂畫伯の裝幀による菊半截判で、體裁は極めて瀟洒、旅行その他の伴侶に至便であります。  
 □解説附目錄 岩波文庫の各書について解説を附した分類總目錄があります。

御申込み次第早速お送り申し上げます。  
 □定價は便宜上星(★)數を以て現はし、★一つが二十錢であります。定價と送料とを表にしますと大體次のやうになります。

★	定價二十錢	送料三錢
★★	四十錢	六錢
★★★	六十錢	九錢
★★★★	八十錢	十錢
★★★★★	一圓	十錢

星數はまた頁數をも現はし、★一つは大體百頁乃至百五十頁であります。  
 □御註文は、すべて前金でお願ひ致します。著譯者名・書名・卷數・冊數及び御住所氏名を横書で明記の上、代金に必ず送料を添へてお送り願ひます。  
 □御送金には「振替東京二六二四〇番」の御利用が最も安全で簡便であります。爲替で御送金頂いても結構であります。また切手代用の場合には一割増に願ひます。

最新刊書

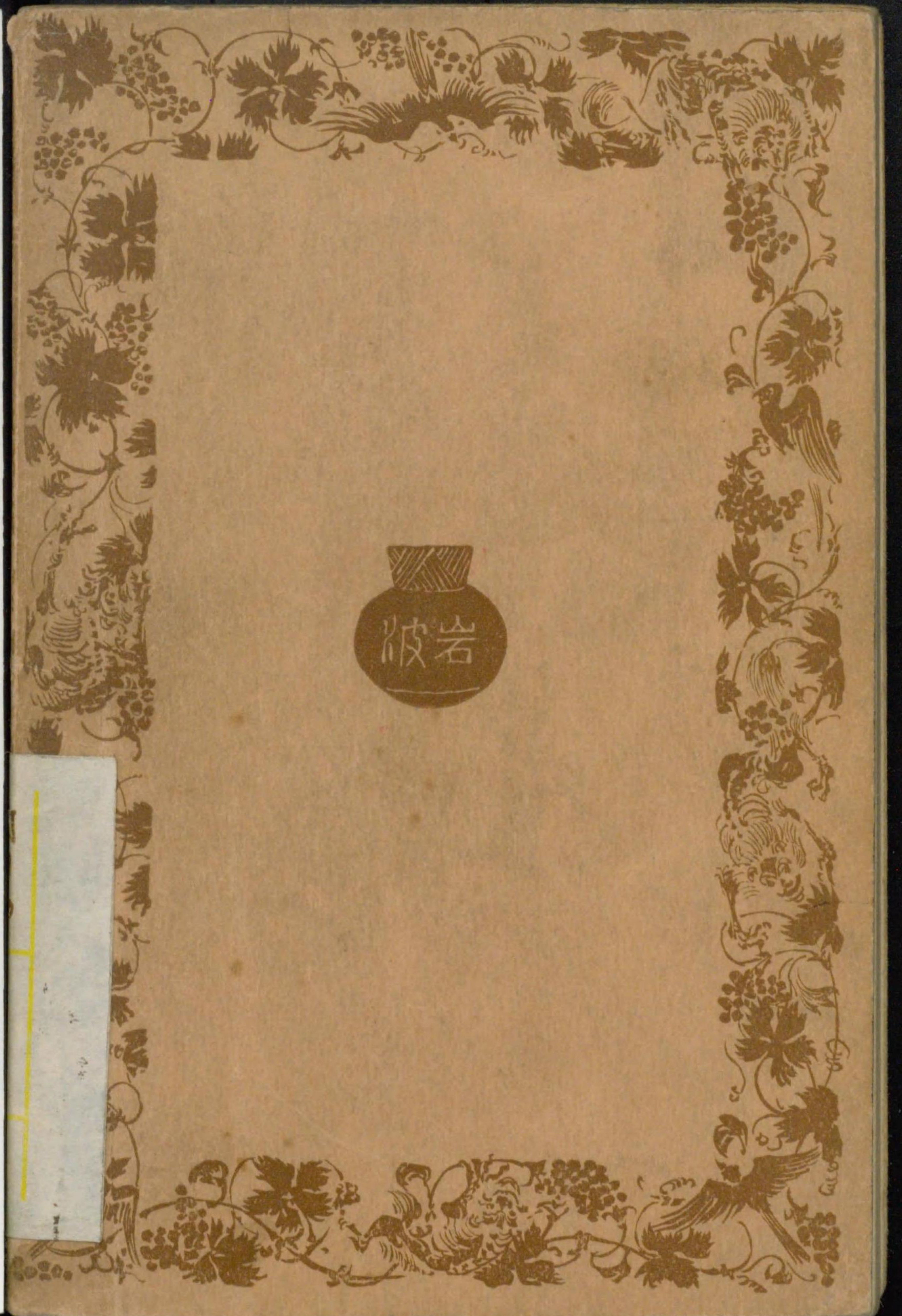
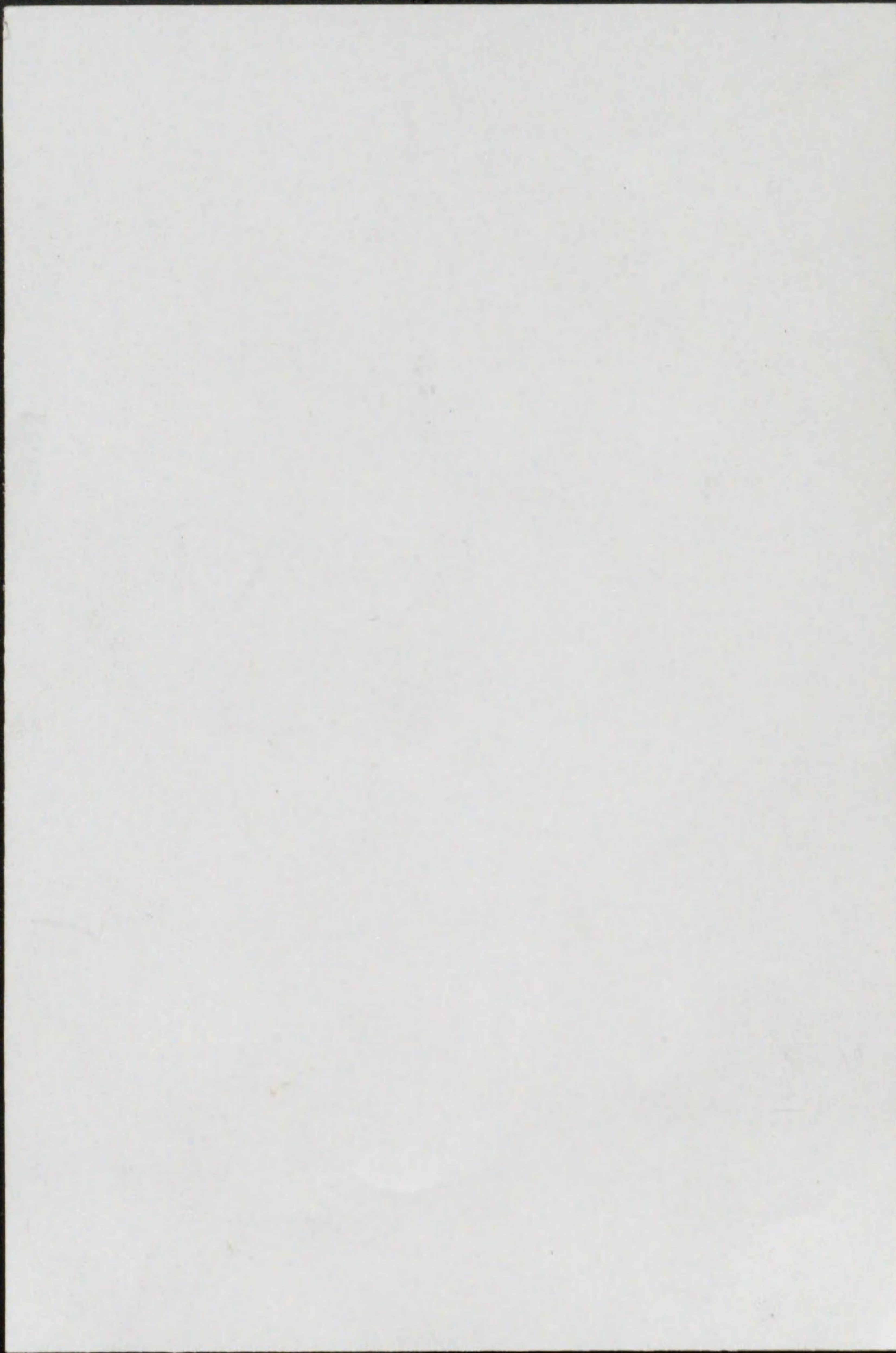
- 白馬の騎手 他一篇 シュトルム作 ★★  
 かくれんぼ・白い母 他二篇 ソログロプ作 ★  
 二都物語 下卷 デイッケンズ作 ★★  
 雀横丁年代記 ライベ作 ★★  
 狹き門 アンデル・ジイド作 ★★  
 評釋千字文 山田健吉註解 ★★  
 ガリレオ・新科學對話上 今野武雄譯 ★★  
 ガリレイ・新科學對話下 日田節次譯 ★★  
 おかめ 笹永井荷風作 ★★  
 射撃祭 伊ケ東勉譯 ★

漂泊の魂(クヌルプ)

- 相良守峯譯 ★  
 外套・鼻 ホーゴリ作 ★  
 青年時代 トルストイ作 ★★  
 カントとマルクス 下卷 フォアレンダー著 ★★  
 限りなきいのち 井上石田譯 ★  
 あだ花 他二篇 モーパッサン作 ★  
 死の家の記録第一部 ドストエーフスキイ 中村白葉譯 ★★  
 笑 ベルグソン著 ★★  
 エネルギイ オストヴルト著 ★★  
 吾輩は猫である上 夏目漱石著 ★★

730  
111

歌大限言道集	草徑集	正宗敦夫校訂	★ ★
日本切支丹宗門史	卷上	レオン・バジエス著 吉田小五郎譯	★ ★ ★
ソクラテスに就て	他三篇	ザインデルバント著 河東涓譯	★
老子	子	武内義雄譯註	★
シャーロック・ホームズの歸還		コナン・ドイル作 菊池武一譯	★ ★
暗夜行路	前篇	志賀直哉著	★ ★
科學と假説		アンリ・ポアンカレ著 河野伊三郎譯	★ ★ ★
歴代名畫記		張彦遠撰 小野勝年譯註	★ ★ ★
死の家の記録	第二部	ドストエーフスキイ 中村白葉譯	★ ★
スピエアの悲劇	上卷	ブラッドレー著 中西信太郎譯	★ ★
吾輩は猫である	下	夏目漱石著	★ ★
狂へる花	(ウルズラー)	ケラ二作 國松孝一譯	★
零落者の群		ゴリキイ作 上田進譯	★
メジン斷	想―日記抄―	清水幾太郎譯	★
詩集孔雀	船	伊良子清白著	★
ハイルブローグ・トヒエン	の少女	クライスト作 手塚富雄譯	★
愉しき放浪兒		アイヒンドルフ作 關泰祐譯	★
脂肪の塊		モーパッサン作 水野亮譯	★
冬物語	―ドイツ―	ハイネ作 井汲越次譯	★ ★
西太極圖說・通蒙		西晋一郎譯註 小糸夏次郎譯註	★ ★ ★



波岩

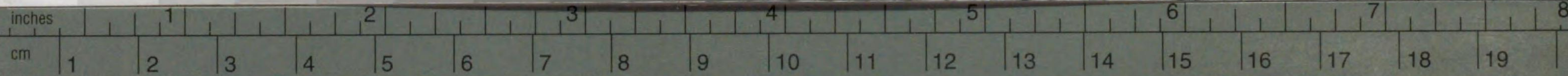


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

